

保護者ボランティアによる読み聞かせ活動 2 学期

★日時：10月18日（火） 8：25～8：40

・小学部 1、2 年担当 平塚 様

「ずっとずっといっしょだよ」

・中学部担当 宮脇 様

「おにより つよい およめさん」

「わすれられない おくりもの」

・小学部 5、6 年担当 深津 様

「数の悪魔」



★活動についてのフィードバックの声

・普段からたくさん本を読んでいる中学生の選書に悩みましたが、今回は全くタイプの異なる絵本を 2 冊読みました。1 冊は現代風にアレンジされた創作民話で「おにより つよい およめさん」、もう 1 冊は、友人同士の在り方や互いの心や技を伝え合う大切さを静かに語りかけてくれる「わすれられない おくりもの」です。中学生にとっては少し物足りない内容だったかもしれませんが、この短い絵本から何かしら感じてもらえたら嬉しいなと思い、心を込めて読みました。

緊張しながらも、心穏やかになれるひと時を過ごせたおかげでしょうか。一日とても気持ちよく過ごせたように思います。読み聞かせ活動を通じて、私も貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

・読み聞かせは難しいなど改めて感じました。（事前に興味のある事、好きな話などを聞いていれば、もっと本を選びやすかったかも・・・）でも、真剣に聴いてくれて、嬉しかったです。

・「ずっと ずっと いっしょだよ」宮西達也

弱虫のティラノサウルスと元気なプテラノドンの女の子のお話です。友達になった 2 人は、ティラノサウルスが強くなれるよう特訓を始めます。でも、失敗ばかりで嫌になったティラノサウルスは特訓をやめると言い、2 人は喧嘩別れしてしまいます。その後、やっぱり友達でいたい 2 人は仲直りをし、真の友達になるのです。しかし、その後ゴルゴザウルスによってさらわれてしまったプテラノドンを手助けしようと、勇気を出して戦ったティラノサウルスは傷ついて倒れ、「ずっとずっといっしょだよ」という言葉を残して動かなくなります。その側には、プテラノドンの女の子が寄り添うのでした。

これが、この絵本のお話です。恐竜の大好きな子どもたちは、真剣にお話を聴いてくれました。本を読み終わったあとも「ティラノサウルスが弱虫なんておかしいや」「恐竜も木の実を食べるんだね」などと話していました。子どもたちが最も気にしていたのは結末。最後に動かなくなった恐竜は「疲れて眠っているだけ」という子と「死んでしまった」という子で意見が分かれました。でも、戦って大けがをしたのだから、死んでしまったのではないかという結論に子どもたちはたどり着いたようです。また、プテラノドンを手放したゴルゴザウルスが本当はどんな姿をしているか気になった子どもたちは図鑑を調べ、3 冊目でようやくその恐竜を発見しました。体はティラノサウ

ルスより小さく、昔の北アメリカに生息していたことがわかると、子どもたちは、日本にいなかったことに少しがっかりしたようでした。このように、色々調べて分かったこともありますが、1つだけ分からないことがありました。ティラノサウルスが食べていた赤い実は何だったのかということです。子どもたちは他の図鑑を調べてみるとはりきってきましたが、見つかったかな？

私の子ども時代を思い返してみると、本にホットケーキが出てくれば作り方が気になったり、主人公がどこかに行けばそこに言ってみたくなったりと、本当に本に影響を受けていた記憶があります。このように、お話の世界だけで終わることなく、それをきっかけとして他のことへも興味をもつことができれば、さらに読者の世界を広げてくれると思います。また、自分で本を選ぶとどこか偏りが出てくるので、他の人が選んだ本を読んでみることも新しいことに出会える良い機会となるのではないのでしょうか。今後も読み聞かせを通じて、自分の世界を広げ、いろいろなことを知ってほしいと思います。

★担当より

1学期に引き続き、読み聞かせ活動にご協力いただきましてありがとうございました。15分という短い時間ではありますが、今回も子どもたちは新たな本と出会い、感動したり、じっくり考えたり、お話のおもしろさに目を輝かせたりしていました。

後日いただいたフィードバックにおいて、「この読み聞かせ活動を通して一日とても気持ちよく過ごせた」という声が寄せられ、私も嬉しく思いました。一学期には朝の時間が取れず、昼読書の時間に教員読み聞かせを行ったことがあったのですが、教員のなかでも、やはり読み聞かせは朝がいいという話になりました。朝、こうした時間を取ることで一日を落ち着いてスタートすることができるというのは、朝読書、朝の読み聞かせの良いところだと私も思います。

その他にも、出会ったお話の内容からさらに世界を広げていってほしいというお話がありました。そのようなことができるのも、本の魅力の一つですね。高学年や中学生であれば、同じ作者の別の作品を読んでもようと思ったり、その作者の人生について知りたくなったりすることも出てくるのではないのでしょうか。あらゆる可能性を秘めた「本」というものに触れることができる、それを読むことができる、お話を聞くことができるということは、本当に幸せなことです。子どもたちには、これからの人生のなかでたくさんの良き本に出会い、自己の世界を大きく広げていってほしいなと私も思います。

また、読み聞かせをしていると、なかには、「このお話、知ってる！」という子どもたちも出てきますが、以前読んだことのある本でも、自分が成長するとそのお話の受け取り方が変わったり、そのときの自分が置かれている環境や状況によって新たに気づいたり感じたりすることがあります。それも本の良いところですね。こうした良い本というのは、何度読み返しても新たな発見、感動があるように思います。私自身、読み聞かせる本を選ぶのに迷うこともありますが、どの本であっても、子どもたちにとっては貴重な「本との出会い」なのだと思います。心を決めて選んでいます。フィードバックでも「自分で本を選ぶとどこか偏りが出てくるので、他の人が選んだ本を読んでみることも新しいことに出会える良い機会となるのでは」というご意見がありましたが、私

もそのように思います。ぜひご家庭でも、読み手、聞き手、共に楽しみながら、読み聞かせを行ってみてください。

さて、今回は「読書の秋」ということで、日本で毎年行われている「読書週間」についてご紹介したいと思います。

日本では、春に「子ども読書週間」、秋に「秋の読書週間」があり、全国各地の小・中学校や公民館等で本のカバー掛けや読み聞かせ、ブックトーク等が行われたり、読書感想文や標語、ポスターのコンクールが開催されたりしています。

読書週間とは「本を読むことを積極的に推奨する期間」のことです。この読書週間が最初に開催されたのは、終戦まもない1947年（昭和22）年のことだそうです。まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。そのときの反響は大きく、翌年の第2回からは期間が10月27日～11月9日（文化の日を中心にした2週間）と定められ、この運動は全国に広がっていったといえます。現在では、『読書週間』は、日本の国民的行事として定着しました。そしてこの『読書週間』が始まる10月27日は、「文字・活字文化の日」に制定されたのです。

しかし、この機会に本に親しもう！とは言いながらも、日本にいるときとは違い、こちらでは日本語で書かれた本を手にする機会が少なくなってしまうのが現状です。公民館や図書館、本屋さんといった本に囲まれる環境に乏しいのは否めません。

そんななかでも、日本人学校には小学校低学年から大人まで親しめる興味深い本が揃っています。本校児童生徒であれば、通常3冊までを2週間、長期休業中には5冊までを貸し出ししています。また毎週日曜日には低学年用図書室も開放しておりますので、ぜひ親子揃って本に親しむ機会としていただけたらと思います。

今年の読書週間のマーク



中学部



読み聞かせの様子



5,6年生

1,2年生